

潮だまりの生態学

—— Steinbeck の自然観 ——

杉 山 隆 彦

ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-88) の作品は、生れ故郷——カリフォルニア州モンテレイ郡サリーナス (Salinas, Monterey Co., California)——に材源を採ったときに最も大きく成功していると言われている。サリーナスを囲む広大な地域がスタインベック・カントリー (Steinbeck Country) と名付けられ、その土地に生れ育ったスタインベックには、その土地の霊が宿っていて、それが彼を内面からつき動かして作品創造へと向かわしめているのだという評者もいる。⁽²⁾

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の大多数の作品がその舞台となっているミシシッピ州北部の架空の地域——ヨクナパトーフア・カントリー (Yoknapatawpha County)——とスタインベック・カントリーとは、しばしば並列されて比較の対象となっている。しかし、この比較は、二十世紀アメリカ文学の大特徴のひとつである「地方主義文学」(Regionalism) の典型的な表われ方としての比較であって、それ以上のものではない。この二人の大作家の類似性はそこに留まるもので、作品の内面についての類似性、近似性といったものではない。

「地方主義文学」の尺度だけで見てゆけば、シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1941) のオハイオ州ワインズバーグ (Winesburg, Ohio) や、アースキン・コールドウェル (Erskine Caldwell, 1903-88) のジョージア州、ウィラ・キャザー (Willa Cather, 1873-1947) のネブラスカ州なども比較の視野に入ってくるようになってしまふ。

このような、いわば物理的・地理的なレベルでのみ地方主義文学を捉えるのではなく、作品に内在する個々の作家の固有の世界観を探らうとすれば、フォークナーの場合は、アメリカ深南部の歴史と社会、およびその閉鎖性が作品創造の根底にあるのに対し、スタインベックの場合は、スタインベック・カントリの豊かな自然が、彼の作品創造の根底にあって、良くも悪しくも、彼の文学を限定づけていることが見えてくる。

本稿では、カリフォルニア州モンテレイ湾の潮だまり——生け簀と言ってもよい——(tidepools) に棲息する無脊椎動物 (Invertebrates) の生態観察から豊かな文学の世界へと進んでいったスタインベックの自然観について考えてみたいと思う。それはそのまま彼の人間観・世界観へと通じているに違いないからである。

1

モンテレイ郡サリーナス生れのスタインベックは、幼い頃から父や母に連れられて、モンテレイ、カームル (Carmel)、パシフィック・グローブ (Pacific Grove) 等、太平洋岸近郊の町を訪れ、潮だまりの小動物——ヒトデ、フジツボ、ヤドカリ、カサ貝など——たちの生態に興味を抱くようになった。

スタンフォードの学生時代 (1919-25) には、好きな科目以外は出席せず、六年間の在籍にもかかわらず、結局、

必要単位を満たすことなく中途退学した。英文学、古典、生物学、とくに無脊椎動物の研究に熱中して、他の時間はすべて作家になるための修業—習作—に当てていたのである。

スタンフォード大学には、ホブキンズ海洋生物研究所 (Hopkins Marine Station) ⁽³⁾ という附置の施設がパシフィック・グローブの海浜——キャブリロ岬 (Cabrillo Point)——にあり、そこはスタインベック家の夏の家や、リケッツ (Edward F. Ricketts, 1897-1948) の太平洋生物学研究所 (Pacific Biological Laboratories) から至近の距離であった。大学の夏学期には、この研究所では生物学だけでなく、一般教養の講義も行われたので、スタインベックは一九二三年の夏学期には、妹メアリと共に在籍した。自然と自然界の営みに対する幼児からの関心が、ここでの経験によっていっそう高まり、生態学的なものの見方を身につけ、それが後の全体論 (Holism)、⁽⁴⁾ 非目的論思考 (Non-teleological Thinking)、方陣の理論 (Phalanx)、あるいは集団人 (Group-Man) の考え方等、スタインベックの思想形成の基礎をつくったのであった。この研究所に入り浸って、その潮だまりに棲息する無脊椎動物の生態を飽きずに観察することで、スタインベックは、人間世界への類推を思い描いたのであった。人間は自然の外側にあって、自然と対立する存在ではなく、自然の内側に位置し、自然を構成する主要な要素である、という認識、すなわち、生態学的世界観をほとんど生得的なものとして身につけていたと言うべく、そこにスタインベックの独得の個性を見出すべきであらう。

スタインベックが、エドワード・F・リケッツという、ある意味では「師」とも言うべき生物学者の友人に出会ったのは、一九三〇年で、場所はパシフィック・グローブであった。このエドの指導と助言によって、スタインベックは、人間や社会を観念的にではなく、生物学的な観点から見ようようになってゆくのであるが、「師」あるいは「友人」にめぐり会うためには、めぐり会うだけのものがこちら側に無くてはならないのは当然で、右に述べたよ

うな個性によって、生物学—動物学—に関心を抱いていたスタインベックが、生物学者エド・リケッツと出会ったのは、ほとんど運命的であったと言ってよい。そしてこの出会いは、スタインベック文学の流れを決定的なものとしたのである。

スタインベックの処女作『黄金の杯』(Cup of Gold, 1929)は、エドに出会う前年の作ではあるが、この作品の中ですでに、スタインベックはシシリーあるいはメタファーを用いて、生物学的なものの見方を随所にひらめかせており、この点でも、彼とエドとの出会いが必然的なものであったことを伺わせる。

2

スタインベックのものの考え方に影響を与えた思想家としては、シエフマソン(Thomas Jefferson, 1743-1826)・エムソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)・ンロウ(Henry David Thoreau, 1817-62)・ホイットマン(Walt Whitman, 1819-92)・シエームス(William James, 1842-1910)等の名前が批評家たちによって指摘されてきたが、実際に彼の諸作品を根底のところまで支えていたコンセプトは、あまりよく知られてはいないが、ジャン・スマッツ(Jan C. Smuts, 1870-1950)・ロブート・ブリフォア(Robert Briffault)・ジョン・ブーディン(John Eloi Boudin)等、進化的思想家たちの考えから得られたものである。

スタインベックの最初の妻キャロル(Carol Janella Henning, 1907-83)はリチャード・アストロ(Richard Astro, 1940-)への書簡(一九七一年九月一日付)の中で、スタインベックが、ブリフォアの人類学の論文『母親』(The Mothers)や、スマッツの有名な『全体論と進化』(Holism and Evolution)をよく読んでいたことを告

げている。⁽⁷⁾

また、スタインベックの親しい友人のひとりであったリチャード・オールビー (Richard Albee) は、同じくアストロへの書簡 (一九七三年二月二十四日付) の中で、一九三〇年代に、スタインベックが仲間たちと共に、ブリフォーをしきりに読んでいたことを証言している。⁽⁸⁾

全体論 (Holism; "holism") というのは、進化の要因は部分的なものではなく、有機的全体であるとするスマツに代表される考え方で、認識・心理・社会・物理・化学等のあらゆる分野で、全体は部分や局所性の機械的総和にとどまらず、むしろ後者を決定する固有の総体 (Whole) であることを強調する立場をいう。

スタインベックは、一九三五年前後の時期にパシフィック・グローブで、「方陣の理論」 ("Argument of Phalanx") という二頁のエッセーを書いて、オールビーに与えている。このエッセーは未公刊の原稿のまま、カリフォルニア大学バークリー校のバンククロフト図書館に所蔵されている。⁽⁹⁾ この貴重な資料を、私は、関西大学の中山喜代市教授のお骨折りで入手することができた。全体論と繋がるスタインベックの小説作法の根幹に触れる重要な考え方なので、その全文 (訳) を次に示すことにする。

人間は究極的な個人存在ではなく、より大きな生き物、すなわち方陣の構成単位である。人間の身体の中にはいろいろな構成単位、つまり細胞があって、それらはおのおの独自の性質を持っており、したがって死滅すれば他の細胞に取って代られ、また、他の細胞から攻撃を受けて殺されることもある。特殊な機能を持った細胞もあれば、代替可能な細胞もあって、さまざまである。何十億という細胞が集まって、人間という新しい個体を構成しているのである。しかし、人間は彼の細胞の総和以上のものであり、人間の性質は、彼の細胞の総和が荷う性

質とはけっしてイコールではない。人間は、彼を構成している細胞たちの想像もつかない、まったく別個の性質を持つているのである。

人間は、彼より大きな生き物、すなわち方陣の構成単位である。方陣にはそれ独自の苦痛、欲求、渴望、闘争があり、それらは、構成単位としての個々の人間の苦痛、欲求、渴望、闘争とは違うものである。ちようど、個々の人間の苦痛、欲求、渴望、闘争が、構成単位としての細胞の持つ苦痛、欲求、渴望、闘争と違っているのと同じことなのである。方陣の性質は、その構成単位である人間たちの性質の総和ではなくて、方陣独自の感情と目的を持った別個の個体（の性質——筆者追加）なのである。そして、その感情や目的は、構成単位としての人間のものとは異質の、次元の違うものなのである。

方陣には記憶（の能力）があり、それは方陣みずからの起源へ、そして生命の起源へと遡ってゆく能力を持っている。失敗と成功についてのこの記憶（の能力）を、人は本能と呼んでいる。人はその本能の効果を味うことはできても、その起源を理解することはできない。方陣の持つ情緒はあまりにも深遠なもので、人が個人としてそれを理解したり経験したりすることは不可能なのである。方陣の持つ情緒のひとつの表われが戦争である。芸術と宗教とは、それが更に大きく表現されたものと言ってよい。

人間の細胞にはそれぞれ専門分化した機能がある。ものを味う機能、喋ったり歌ったりする機能、あるいは、音を聞きわけける機能といった具合にある。それと同様に、方陣にも、方陣固有の専門分化した機能があるのである。芸術家たちは方陣に成り代って発言し、方陣の（持つ）知識の深さをきわめて正確に測定してくれる。牧師や殉教者には方陣に固有の情緒の痕跡が残っている。軍人や経済界の指導者は、方陣が構成単位としての人間を必要とする時には、彼らを巧みに導いてゆくが、その必要が無くなると、彼らを消滅させるか、あるいは、い

ちど与えた専門分化した機能を彼らから剝奪してしまうことにもなる。

方陣の構成単位としての個々の人間の内部には、つまり、彼の内奥に潜む潜在意識の中には、彼が方陣の構成単位となるための調整装置が組み込まれているのである。活動する方陣の構成単位となったとたんに、彼の本性は変化し、彼の日常の習慣や欲望も変化してしまう。方陣が活動を開始すると、方陣はその構成単位である人間を鉄の規律でコントロールするのである。方陣の必要に応じて構成単位（としての人間）の出生率に変化が生じるだけでなく、個々の構成単位の（身体の）大きさ、気質、色つや、骨格などの変化も生じてきたりする。環境に対しての方陣の抵抗は、個人としての人間の抵抗などよりはるかに烈しいものと言わなければならない。

活動を始めた方陣の一単位として組み込まれてしまうと、人間は、個人的存在として行動しては考えられないような偉大な業績、忍耐、思想、情緒を生み出すことができるようになる。方陣が必要とすれば、人はみずからの存在そのものを消滅させられることにもなるのである。とつぜんに病気に罹ったり、喧嘩によって構成単位としての人間が同士討ちによって死滅させられたり、また時には、性的不能に陥って子孫をつくることができなくなったりして、消滅させられるということになってしまう。

方陣が活動を停止している時には、構成単位である人間への強制力は弱まるので、人間も、その間だけは、完全無欠な個人存在で、したがって、より大きな非個人的存在の中に巻き込まれていないように見えることがある。しかし、方陣はいつ何時、予告も無しに活動を始めるかもしれないのである。すると方陣の構成単位となった人間は、強烈な刺激を受け、武器を与えられ、攻撃目標を与えられる。いっぽう、方陣は強い衝動に駆られて、構成単位（である人間）に隊伍を組ませるのである。すると、構成単位（である人間）は「神が現われたい！」とか「われわれは鉄で守られているのだ！」などと叫び、方陣は、それを受けて、みずからの認識に基づ

いて動き出すというわけだ。

人間が方陣を拒否すれば、彼はかならず破滅してしまふ。方陣とのあらゆる絆を断ち切つて人間が荒野に入つてゆくとしよう。そうすると、彼の精神は涸れ果て、情緒作用が失われ、恍惚感を味わう能力が無くなり、肉体はやせ衰え、空腹感にさいなまされ、やがては飢餓によつて死に到るであらう。方陣の構成単位となることでのみ得られる滋養物が失われるからである。

方陣の規模は定まったものがあるわけではなく、また、方陣の寿命も一定しているわけではない。千年の寿命を持つ方陣があるかと思えば、数週間しかもたないものもある。「我が名において集められた二人か三人」で構成される小さな方陣もあれば、全タートル人で構成された方陣もある。最初は臆病な遊牧民のばらばらなグループだったのが、とつぜん、破壊力を備えた方陣へと変質し、ヨーロッパ中に炎を拡げていったのであつた。

単細胞原虫類から羚羊、ライオンに至るまでの生物、蟹からレミングに至るあらゆる生命体は、方陣を形づくり、または方陣の一部となる。しかし、構成単位を人間とする方陣は、他のいかなる方陣よりも複雑で多様性に富み、強い力を発揮するのである。

われわれはこれまで常に、人間を個別的な存在として研究の対象としてきた。つまり、個々の単位としての人間を詳しく調べることで、人間や人間の行動を研究しようとしてきた。それはまるで、人間の身体の細胞を調べれば、人間の性質が理解できると考えているようなものではないか。方陣をよく観察し、方陣がそれを構成している単位としての人間とはまったく別の、一箇の新しい個体であることを認識し、更に、さまざまな刺激のもとでの方陣の習性をたがいに関連づけ、分析しながら、方陣がこれまでに達成したいろいろな事柄を振り返つてみるならば、われわれは、おそらくやがては、方陣とは何かということや、方陣の性質、その動き、その目的等に

ついで知ることが可能になるだろう。そして、無意味で破壊的な、てんでんばらばらな現象が弥漫している今日の世界の中に、方陣の運動を導入することさえ可能となるであろう。

「方陣」の理論は、人間を「これ以上は分割することの不可能な存在」としての「個人」(individual: "in-divisible + al")に還元して考えるという、近代的自我の確立の立場と異なり、むしろ、人間は個々に孤立(個立?)しては存在し得ないものである点に着目した立場であると言えよう。しかし、この立場はけっして新しいものではなく、遠くはライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716)の「存在の階段」(Scale of Being)——動物から植物を経て動物へ、単細胞原生動物から人間へと繋がる万物の連鎖を単純から複雑への上昇と見る態度——からヘイムソンの「存在の連鎖」(A subtle chain of countless rings...)へと続く進化の思想の延長線上に置いて見るべきものである。

万物がひと繋がり(の連鎖)をなしているという考え方(the Chain of Being)は生態学の中心的基盤をなすものであり、スタインバックはかなり早い時期に(一九四一年)この考え方に親近感を寄せている。

『ホルテスの海』(Sea of Cortez, 1941)の中で、スタインバックは『ブリタニカ百科事典』(Encyclopaedia Britannica, 14th Edition, Vol. VII, p. 916.)を引用しつつ、次のように書いている。

次の具体例によって、創発的進化の形質に着目してもらいたい。これは、一見したところでは納得できるのだが実は間違っている最初の素朴な理解と比較してみると、深い意味を持っていることがわかる。かつて、ノールウェイの重要な狩猟鳥ウィロー・グラウス(雷鳥の一種)が絶滅の危機に直面していることが明らかとなったの

で、保護の規則を制定して、雷鳥を大量に食うことがわかっている主要な敵ともいべき鷹に対して報奨金を出すのがよからうということになった。大量の鷹が根絶させられたが、このような荒療治にもかかわらず、雷鳥は以前よりも明らかに急速に姿を消していってしまった。素朴に考えて採られた常識的な措置は明らかに失敗したのである。しかしながら、落胆して、手を拱いて、雷鳥に、うみすずめ——翼が退化したために十九世紀中頃に絶滅した、おおうみがらすに近似の絶滅鳥——や、これまた絶滅してしまった北米産渡り鳩の辿った道を歩ませることなく、当局は調査の規模を拡げて、遂にこの異常な事態の原因をつきとめたのである。この異常な事態に見られる相互関係的な ("relational") 側面を生態学的に分析した結果、コクシデューム症という寄生虫病が、雷鳥の間で流行していることが判明した。この病気の初期には、雷鳥の飛翔速度が非常に鈍るので、それほど重症でない雷鳥でも、たやすく鷹の餌食となってしまうたのである。軽いコクシデューム症に罹った雷鳥を喰いもの⁽¹⁾ によることで、鷹はこの病気が猛威をふるって他の健康な雷鳥にまで蔓延することを防いでくれていたのだ。このようにして、雷鳥の敵と思われていた鷹が、コクシデューム症の蔓延を抑えているという事実によって、実は姿を変えた味方であったことが判明したのである。

右に見たように、表面的な因果の関係 (にあると錯覚していたのだが) だけに眼がいつてしまつて、期待していた原因を唯一の原因だと錯覚してしまふ目的論 (Teleology) の陥穽を、スタインベックは「ポスト・ホック・エルゴ・プロプター・ホック」の誤謬 (the "post hoc ergo propter hoc" fallacy) と呼んでいる。⁽²⁾ この誤謬のわかり易い実例をスタインベックは挙げているので、次に二例について見てみよう。

A なぜある人は他の人より背が高いのか。

この問いに対して目的論者は次のように答える。「それは成長を規制する内分泌腺の機能不全が原因である」と。この答は単純明快のように見えるが、単純明快というのには要するに、不適切かつ不完全な働きの結果なのである。すこしばかり利巧でものおじしない子供だったらすぐに、この答に対して反論するはずだ。「じゃあ、なぜ内分泌腺が十分に機能しないのですか」と。この子供は知らず識らずのうちに、非目的論的思考方法 (Non-teleological Thinking methods) を暗示し、目的論的思考方法がすぐに行きづまってしまふ膠着状態を指し示しているのである。

非目的論的思考をすれば、「答」などは存在しない。あるものはただ、具体的な事実だけであって、その事実は、知の世界が拡がるにつれて大きくなり、また意味を持ちはじめるのである。人間の身長の違い（の原因）については、とりあえず、次のように考えることができる。

(1) 偏差というのは普遍的かつ根源的なもので、どんな実在物の集合の中にも見られるものである。剃刀の刃にも物差しにも、石ころにも、また樹木であれ、馬であれ、マッチであれ、偏差はあるのである。人間として例外ではない。

(2) この場合、偏差は平均値からの高さとは低さへのずれとするのが適切であろう。すなわち、身長測定の統計、あるいは常識的観察によって決定される成人の標準身長からのずれとして捉えるのである。

(3) 平均身長以上に高く分布する人の場合、成長を規制する内分泌腺の機能不全と常に関係があるように見えるが、その関係はあくまでも、A氏をB氏のインデックスとして見なし得る、という限度内においての「関係」なのである。

(4)背の高さと関係があることが判明していることは他にもある。内分泌腺のあらゆる段階における代償的調整の機能などがその一例である。他にもまだ要因はあるかもしれない。その要因は、個別的には重要なものではなく、未だ発見されていないものかもしれないが、集団的に見ると重要なもの、つまり、それらが集まると、ある危険区域を乗りこえてしまうような要因があるかもしれない。

(5)今、問題としている背の高い人が他の人より背が高いのは、右に述べた関係が見られる集団の中に彼が入っているからに他ならない。言いかえると、「彼は背が高いから背が高いのである」。

今までのところ、このような具体的事実¹は統計上の事実、ないしは「存在」の事実ということができ、これは、目的論者の「答」——実はまったく「答」などと言えないものではないのだが——よりは複雑な図式と言えらるう。「複雑」というのは、しかし、現実が複雑であるという意味においてのことにはすぎない。「存在」(being)という語の単純さが正しく理解されれば、それは実は単純な図式なのである。

B なぜあるマッチ棒は他のマッチ棒より長いのか。

人間の身長の場合と同様に、マッチ棒の集合をよく吟味してごらんなさい。最初はみな同じ長さであるように見えるだろう。しかし、キャリパー物差しで注意深く測り、あるいは、分析用天秤で重さを測りさえすれば、違いが見つかるのである。いちばん長いものでも平均から0.01パーセントのずれしかないと考えてみてください(実際にはもっと大きなずれがあるはずですが)。たとえそれほど僅かな偏差であっても、大きな有意差となることがあるのである。軟体微生物アメフラシの場合など、その偏差は致命的なものとなる。偏差は平均と仮定される数値からのプラス・マイナスのずれとして扱うことができるが、この仮定の平均値に厳密に一致するような実例はひと

つとして見つからないであろう。そこで、この問いの無意味さが明白となる。マッチ棒の長さの違いには特別の理由はない。ただそれだけのことである。場合によっては、他の要因よりも重要度の高い要因があるかもしれない。偏差は普遍的であるから（偏差を生む要因そのものにさえ偏差はあるのだから）、確かにそのような要因はあるだろう。ある要因が圧倒的に重要であることさえないわけではない。しかし、今出されている質問は的外れと言わなくてはならない。これに対する望ましい答は「何でも質問したくなるのは、まさに人間の性なのだ」ということになる。こう言ったからといって、人間を蔑んでいると解する必要はない。あるものの「性質」を理解し得たということは、それ自体、相当な成果であるからだ。

3

『コルテスの海』第十四章（三月二十四日、復活祭の日曜日）は、スタインベックの有名な「非目的論思考」が徹底的に論じられている重要な章となっている。しかしながら、リケッツとの共著である本書の本文五七八頁のうち、半分の二七七頁分に当たる「航海日誌」⁽¹³⁾は、スタインベックが執筆したことになってはいるが、重要な部分は、ほとんどリケッツからの口移し⁽¹⁴⁾であったことが判明しているので注意が必要である⁽¹⁵⁾。

非目的論思考というのは、世界に継起する全ての事象をそれが置かれてままの状況で捉えようとする態度で、生態学のもうひとつの重要な基盤をなすものであることは言うまでもない。物事に、原因・結果を求めること、つまり、「なぜ」(“Why”)を問うことを拒否して、物事に付随する可能性、期待感、当爲、希望といった來雜物を極力排除する思考方法。あらゆる価値判断の基準は、「何」(“What”)が「いかだ」(“How”)そこにあるかを

見つめて、それを正確に測定し、理解する以外には無いとする立場である。

このような考え方は、おそらく、先にも述べたスタインベックの長年にわたる生物学、というよりも博物学、への傾倒と切り離して考えることはできない。人間を「動物」とは異なる次元で捉えようとする、在来のコギト中心の考え方が、人間の真のすがたの理解を阻害してきたのだ、という認識がそこにはあるだろう。人間が「動物」とは異なる存在であることは明白であるとしても、なお、人間は「動物」である、というアンチノミーに身を置くことによって、在来の人間哲学では把握し得なかった人間存在のありようを追求しようとする立場である。

非目的論思考は、カフカ (Franz Kafka, 1883-1924)・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-80)・カミユ (Albert Camus, 1913-60)・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) 等、近代世界文学の代表選手たちの思考方法、つまり不条理の哲学との近親性を持っているのである。「不条理」とは、人生には何らの意味も見出し得ない、という明確な認識の立場に身を据えて、そこを出発点として、人間存在の新しい意味をつかみ取るうとする烈しい意志を生み出す母胎ではなかったのか。在来の固定化した観念や、論理のパターンに当てはめて、人生に妥協的な意味を付与し、将来への観念的な希望、期待、当為などを身につけることによって現実を見失うことを怖れるすがたこそ、ザムザの⁽¹⁶⁾、ロカンタンの⁽¹⁷⁾、ムルソーの⁽¹⁸⁾、あるいはクレブスの⁽¹⁹⁾のすがたであったことを思うべきである。因みに、ヘミングウェイとスタインベックの言葉を並べてみよう。著しい類似をそこに読み取らないのは難しいのである。

私は当時作家になろうと努力していた。そして私がいとも難しいと思ったことは、行動として実際に起こったこと (what really happened in action) を書くということ、つまり、経験する感情を生み出す現実のもの

(what the actual things were which produced the emotion that you experienced) が何であるか、を描くことであつた。(ヘミングウェイ『午後(20)の死』)

非目的論的な考えは「存在」(“is”)の思考から生れてくるのである。……非目的論思考は、何よりもまず、現にそこに「存在」するもの(what actually “is”)と係わるのであつて、どうあるべきか、どんな可能性があるか、どんなふうになるか、などということは係らない。つまり、「なぜ」(“why”)ではなく、「何」(“what”)が「いかに」(“how”)あるのかに答えようとするものなのである。(スタインベック『コルテス(21)の海』)

「神聖な」とか「光榮な」とか「犠牲」とか、その他無用のことばに会うと、私はいつも当惑させられてきた。……聞くにたえないことばがたくさんあつて、そのため、しまいには、土地の名前だけが威厳を持つようになつてしまった。……「榮光」「名譽」「勇氣」「神聖なる」などという抽象の語は、村の名前、道路のナンバー、川の名前、連隊の番号、日付け、等のそばに並べてみると、わけつな(22)ことばであつた。(ヘミングウェイ『武器よさらば』)

人間には奇妙な二重性があつて、それが倫理的矛盾を作り出すのである。善と悪との性質について定義がちゃんとあり、善の中にわれわれは、知恵、寛容、親切、寛大、謙遜などを入れ、残酷、貪欲、利己心、強欲、強奪などは忌むべきものとされている。しかし、現実の社会では、いわゆる善の性質を持つものは失敗の原因であり、逆に、悪の性質を持つものは成功の基石となつているのである。動物の世界では、「善」は生存力の弱さの指

標であり、「悪」は生存力の強さの指標となっているのである。(スタインベック『ロルテスの海』)⁽²³⁾

非目的論思考の根幹をなすと考えられる部分を、次に『ロルテスの海』から抜粋してみよう。

Non-teleological ideas derive through "is" thinking, associated with natural selection as Darwin seems to have understood it. They imply depth, fundamentalism, and clarity—seeing beyond traditional or personal projections. They consider events as outgrowths and expressions rather than as results; conscious acceptance as a desideratum, and certainly as an all-important prerequisite. Non-teleological thinking concerns itself not with what should be, or could be, or might be, but rather with what actually "is"—attempting at most to answer the already sufficiently difficult questions *what* or *how*, instead of *why*.... Strictly, the term non-teleological thinking ought not to be applied to what we have in mind. Because it involves more than thinking, that term is inadequate. *Modus operandi* might be better—a method of handling data of any sort.⁽²⁴⁾

(訳) 非目的論思想は、ダーウィンが理解していたような自然淘汰と結びついた「存在」の思考から生れてくるのである。伝統的な、あるいは個人的な枠組みを超えた見方をするのだから、それは、深さ、根本原理、明快さを包含することになる。(原因があつて生じる)結果として出来事を見るのではなく、自然の成り行き、または(ただ)そこに現われたものとして出来事を見つめるのである。ひとつの切実な要求として、また絶対に不可欠

の必要条件として、進んで受け入れる態度である。非目的論思考は、何よりもまず、現にそこにあるものと係わるのであって、どうあるべきか、どんな可能性があるか、どんな偶然性をもつか、などということとは係わらない。つまり、「なぜ」ではなく、「何」が「いかに」あるかというそれ自体充分に難しい問題に、精一杯答えようとするものなのである。……厳密に言うと、非目的論思考という用語は、われわれが頭で思考していることに結びつけるべきではない。思考を超えたものに係わるのだから、非目的論思考という用語は適切とは言えない。「作業手続き」、すなわち、どんな種類のものであれ、存在するデータを処理する手段、と言うべきだろう。

右のような思考方法を、スタインベックにほとんど「口移しのように」吹きこんだエド・リケッツについて、簡潔に触れておきたい。

エドワード・F・リケッツはシカゴの敬虔なエピスコパル教会員の息子として、一八九七年五月十四日に生れた。伯父の感化で生物学に興味を持ち、イリノイ州立教育大学 (Illinois State Normal University) で動物学を学んだ。その後いくつかの職業に就いた後、シカゴ大学 (The University of Chicago) に入り、生物学を専攻したが、一九二二年に中退して、翌一九二三年に西海岸へ来て、一九三〇年にスタインベックと出会った。モンテレイのオーシャン・ビュー・アベニュー (俗称、罐詰横町) に太平洋生物学研究所を開設し、その経営者となった。一九三九年からはスタインベックも、この研究所の共同経営者となっている。先にも述べたように、スタインベックの世界観、とりわけ生物学的なものの方に大きな影響を与え、ひいては彼の文学に決定的な方向づけをした。また、『天の牧場』(The Pastures of Heaven, 1932) から『たのしい木曜日』(Sweet Thursday, 1954) にいたるほとんど全ての作品に、リケッツの影響が見られ、特に次の諸作品では、重要な登場人物のモデルとなっている。

- * 『勝敗のわからぬ戦ふ』 (*In Dubious Battle*, 1936) —— ドック・ブートン (Doc Burton)。
- * 『蛇』 ("The Snake," 1938, 初出は 1935) —— ドクター・フィリップス (Dr. Phillips)。
- * 『月は沈みぬ』 (*The Moon Is Down*, 1942) —— ドクター・ウィンター (Doctor Winter)。
- * 『罐詰横町』 (*Canary Row*, 1945) —— マック (Doc)。
- * 『らんらん」と燃える』 (*Burning Bright*, 1950) —— 友人エド (Friend Ed)。
- * 『たのしい木曜日』 —— マック (Doc)。

また、スタインベックは『コルテスの海航海日誌』 (*The Log from the Sea of Cortez*, 1951) では、その巻頭に「エド・リケッツのごと」 ("About Ed Ricketts") という長文のエッセーを掲げ、その中で十八年間におよそ二人の交友を語り、興味あるエピソードをいろいろ紹介しながら、尊敬の念をこめてリケッツの愛すべき人間像を浮き彫りにしている。

リケッツは一九四八年五月七日、自分の運転するくるま (おんほろのパーカード) がサンフランシスコからやって来たデル・モンテ行き急行 (the Del Monte Express) の列車に衝突して、四日後に死亡した。彼の最期のことばは「機関士を責めるなよ」 ("Don't blame the motorman.") だった。数多い遺稿は、ジョエル・ハッジンス (Joel W. Hedges) によって編集された、一九七八年に『外海の島々』二巻 (*The Outer Shores*, 2 vols.) として刊行された。今日、貴重な文献となっている。⁽²⁸⁾

非目的論思考についての論述は、すでに詳しく示したように、けっしてスタインベック独自の見解であるとは言えないが、その中の「作業手続き」(“*Modus Operandi*”)というフレーズを、作品創造の主要な方法として活用し得たところに、作家スタインベックの凡庸ならざる才能を感じ取ることができる。すなわち、この「作業手続き」によって、スタインベックは、二十世紀世界文学の大きな潮流であったモダニズム (Modernism) の中のひとつの支流を形作っているのである。

モダニズムというのは語源的にみて、モード (mode) 中心の考え方という意味である。すなわち、いっぽうでは、「ただ今」(just now) とか「近年」(lately) を意味し、他方では、「手段・方法・スタイル・ファッション」(measure, manner, style, fashion) 等を意味している。つまり、「今日の流儀」(fashion just now) ということである。したがって、このモードという一語の中に、モダニズムのいっさいが含まれていると考えることができる。言い換えると、認識におけるそれまでの「模写的認識」とはまったく異なるパラダイムが、一九二〇年代に入って登場してきて、そのパラダイムを「今日の流儀」ないしは「現代的なスタイル」として、モダニズムと称したのであった。

ロマンティズム (Romanticism) や自然主義 (Naturalism) は、書くことによって真理—現実を提示した。つまり、真理—現実を作家が「所有」していた。あるいは「生産」していた。そして読者はそれを「消費」すべきものとされていた。それに反して、モダニズムは、このような「所有」性ないしは「生産」性の神話を破壊して、作

家は真理―現実を「生産」し「所有」するのではなく、その可能性を追求するものだとしたのである。芸術作品は鑑賞のためにあるのではなく、ある状況、ある精神の場を動かすための道具として機能するものだと思ふようになった。モダニズムの作品そのものが、真理―現実を探究する手段、すなわちモードとなったのである。

古いモードではもうやってゆけない、第一次世界大戦以前のモードでは駄目だ、という感覚、認識にそれは依っている。この場合、やはり、第一次世界大戦の引き起こした政治的・社会的な大変動、D・H・ローレンスのいう「キャタクリズム」⁽²⁶⁾と、その戦争体験が大きく影響している。その認識の表われ方を主要な作家について見てみたい。

ジョイス (James Joyce, 1882-1941) は「沈黙と亡命と巧妙な知恵」だけを武器にして「できるだけ自由に、できるだけ完全なかたちで」自分の信じていることだけを書いてゆこうと決意する⁽²⁷⁾。巧妙な知恵の最たるものが、「内的独白」(Monologue Interieur)⁽²⁸⁾であり、「意識の流れ」(Stream of Consciousness)であった。

バージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) にとって、「人生は釣合いいく並べられた一連の馬車のランプの光とは違って、それは、光まばゆい暈輪であり、意識の初めから終りまでわれわれを取り巻いている半透明の膜」であって、「この変幻きわまりない、何物にも把われない、未知の精髓を書き表わすことが、小説家の任務」⁽²⁹⁾だったのである。

プルースト (Marcel Proust, 1871-1922) の一時間は「ただ単なる(物理的な)一時間なのではない。それは、いろいろな匂いや音や、計画や気候などが、いっばいに詰まった瓶」であった。そして「われわれが現実と呼んでいるものは、われわれを常に取り巻いている感覚と記憶の作り出すある種の関係」であり、その「ユニークな関係を作家は見つけ出して、そのことばの中に、その関係を永久に繋ぎ止めておかなくてはならない」。なぜかというところから、⁽³⁰⁾「そのような関係がそこに存在しないとしたら、何も存在しないことになってしまう」からなのであった。

フォークナーにとって、「この世の中には、三語で語るのも多過ぎるような（簡単な）事柄があると同時に、三千語費してもまだ足りない（複雑な）事柄もあ」った⁽³¹⁾。半透明の膜や、ものがいっぱい詰った瓶を、何とか正確に表現しようとすると、どうしてもことば数が多くなるのは致し方のないことであったのだ。フォークナーの文学世界が晦渋なのは、現実が晦渋なのだから、それを何とかして精密に表現しようとする努力の結果であったにすぎないのである。

ヘミングウェイは「聖らかなとか、輝しいとか、犠牲とかいうような空虚なことばにいつも当惑させられていた。聞くに堪えないことばがたくさんあって、しまいには、（彼にとっては）土地の名前だけしか威厳をもたなくなってしまう」のであった。「村の名前、道路の番号、川の名前、連隊の番号、日付け等（具体性のあることば）のそばに置いてみると、光榮、名譽、勇氣、神聖視する、などという抽象の語は実にいやらしい、わいせつなもの」と響いていたのである⁽³²⁾。

また芥川龍之介は「私は不幸にも知っている。時には謙に依るほかは語れない真実のあることを」という箴言によって、当時の日本の文壇を支配していた自然主義的方法、身辺雑記的な私小説、また、プロレタリア・リアリズムに対して一矢を報いたし、高見順は「わたしは描写のうしろに寝てゐられない」と書くことで、模写的認識のみによる外面描写に対する不安を表明したのであった⁽³⁴⁾。

5

スタインベックのモダニズム⁽³⁵⁾は、「作業手続き」というモードに端的に表われている。（非目的論思考の項参照。）

そして、このモードがもっとも大きく成功したのが『はつかねずみと人間』(Of Mice and Men, 1937)であった。この場合のモードは「ブレイ・ノベレット」という彼独自の方法である。⁽³⁶⁾ すなわち、「読めるドラマ、ないしは、対話だけを抜き出してすぐに上演できる短い小説」のことで、作者の全知的視点を許さずに、小説の中の出来事を、「ある原因があって生じたものではなく、自然の成り行き、または(ただ)そこに現われたものとして」見つめ、描いてゆく。つまり、レニーが「なぜ」カーリーの妻を殺したのか、そしてジョージは「なぜ」かけがえのないレニーを殺してしまったのか、というような、目的論思考による形骸化した論理のパターンに、出来事をはじめこんで、妥協的な意味づけをすることを拒否するのである。

『はつかねずみと人間』が、はじめ「ある出来事が起こった」(“Something That Happened”)という仮りのタイトルのもとで書かれていたことには、見逃せない大きな意味がある。リケッツからの影響ではあるが、出来事には原因も結果も無く、問題もその解決も無く、英雄も悪漢も無く、ただ、ひとつの出来事がそこに発生した、という事実を、非目的論的に描こうとする意欲が、この仮りのタイトルに如実に示されているからである。この作品は見方によっては、悲劇とも、社会的抗議の作品とも、また、象徴的作品とも、あるいはアイロニーとも、というふうな、様々な解釈が可能だが、そういう解釈は、ともすると固定された観念に読者を縛りつけ、将来への希望的観測によって、現実を見る彼の眼を曇らせる怖れがある。だからそれらを全て拒否して、そのような解釈を生み出すもとなつて、現実を見る事実としてのみ提示することが、スタインベックの思想を表現するための「作業手続き」として前提されなければならないのである。この小説が六つのパート(あるいは六つの章)に分かれて、それがあたかも三幕六場の戯曲のように構成されているのは、非常に大きな効果を生み出している。⁽³⁷⁾

スタインベックの、このような「作業手続き」について、アストロは、スタインベックが「リケッツの非目的論

思考を、小説のテーマとして用いているのではなく、小説を制作する技法として用いているのだ」と明確に指摘している。⁽³⁸⁾

スタインベックは一九四三年の春に、最初の妻キャロルとの離婚が成立し、その直後に二番目の妻グウィンドーリン・コンガー (Gwyndolyn Conger) と結婚した。この前後から、彼は生活の中心をニューヨークに移し、やがて、終の住みかとなるロング・アイランドのサグ・ハーバー (Sag Harbor, Long Island, New York) に定着することになる。このことは同時に、長い年月にわたって、彼の文学上の、いわば「師」であったリケッツから遠く離れることを意味した。地理的に離れただけでなく、それまで数々の優れた作品を書いた時の「作業手続き」からも遠ざかっていったことを意味する。のみならず、彼の創造意欲をかきた立ててくれたいた地霊の宿るスタインベック・カントリーから遠く離れて、デラシネとなって、新たな彷徨をすることになったのである。

一九四五年の『確詰横町』で「熱い人生の意味を賞味した⁽³⁹⁾」と、ドックに言わせた後、スタインベック文学は沈滞の季節に入ってゆく。有効な「作業手続き」を見失ったスタインベックの、それはおのずからなる帰結であったのかもしれない。スタインベックの死のほとんど直後に、ピーター・ショウは次のように書いている。

スタインベックは、不幸なことに、彼の生物学的客観主義を、単にひとつの技法として受け入れることができなかつた。それどころか、彼はそれを、ひとつの人生哲学として考えないではいられたのであつたのである。彼が自らに対して無用の困難な要求を提出し、その結果、創造のエネルギーを浪費しすぎてしまつた理由は、まさにその点にあつたのである。⁽⁴⁰⁾

潮だまりの無脊椎動物の生態の中に、スタインベックは人間世界の営みとの類推を見て取り、両者とも、散漫ではありながらも、破綻なく機能していることに着目した。潮だまりで、ナイフの刃の上に、そっと、ヒトデやフジツボや、ヤドカリやカサ貝を掬い上げると同じように、彼は、人々の生活を、ありのままに記録することに成功した。⁽⁴⁾潮だまりが、スタインベックによって、そのまま、豊穡の角へと変質させられていったのである。そして、まことに残念なことではあるが、『確詰横町』以後、この豊穡の角が「不満の角」へと変質してゆくプロセスを、次に見てゆかなくてはなるまい。

注

- (1) Steve Crouch, *Steinbeck Country* (Palo Alto, Calif.: American West Publishing Company, 1973).
- (2) Claude-Edmonde Magny, "Steinbeck, or the Limits of the Impersonal Novel," in E. W. Tedlock, Jr., and C. V. Wicker, eds., *Steinbeck and His Critics: A Record of Twenty-Five Years* (Albuquerque, N. M.: University of New Mexico Press, 1957), pp. 216-27. Originally published in Claude-Edmonde Magny, *L'Age du Roman Américain* (Paris: Editions du Seuil, 1948).
- (3) カリフォルニアの鉄道王マーク・ホプキンス (Mark Hopkins, 1813-78) の養子ティモシー・ホプキンス (Timothy Hopkins) の寄付により、一八九二年に設立された太平洋沿岸最初の海洋生物研究所。
- (4) Mary Steinbeck (1905-65), スタインベック家の末っ子。
- (5) 拙論『黄金の杯』——スタインベック論「事始め」——(成城大学短期大学部『紀要』第一号、一九七〇年一月、七八—一八〇頁)。
- (6) Richard Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts: The Shaping of a Novelist* (Minneapolis, Minn.: University of Minnesota Press, 1973), p. 48.
- (7) *Ibid.*

started which line of speculation since the end thought was the product of both minds. I do not know whose thought it was.

- (16) Franz Kafka, *Die Verwandlung* (1916) (邦訳『変身』) の主人公 Gregor Samsa.
- (17) Jean-Paul Sartre, *La Nausée* (1938) (邦訳『嘔吐』) の主人公 Antoine Roquentin.
- (18) Albert Camus, *L'Étranger* (1942) (邦訳『異邦人』) の主人公 Meursault.
- (19) Ernest Hemingway, "Soldier's Home," in *In Our Time* (1925) (邦訳『兵士の帰郷』) の主人公 Harold Krebs.
- (20) Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon* (London: Jonathan Cape, 1932), p. 10.
- (21) John Steinbeck, *Sea of Cortez*, p. 135.
- (22) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1929), pp. 184-85.
- (23) John Steinbeck, *Sea of Cortez*, p. 96.
- (24) *Ibid.*, pp. 135-47.
- (25) Joel W. Hedgpeth, ed., *The Outer Shores: Explore the Pacific Coast*, 128pp.
Part 1: *Ed Ricketts and John Steinbeck Explore the Pacific Coast*, 128pp.
Part 2: *Breaking Through*, 182pp.
- (26) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* (Penguin Books, 1960), p. 5. Originally published in 1928.
Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically. The cataclysm has happened, we are among the ruins, we start to build up new little habitats, to have new little hopes. It is rather hard work: there is now no smooth road into the future: but we go round, or scramble over the obstacles. We've got to live, no matter how many skies have fallen.
- (27) James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man* (London: Jonathan Cape, 1964), p. 251. Originally published in 1916.
Look here, Cranly, he said. You have asked me what I would do and what I would not do. I will tell you what I will do and what I will not do. I will not serve that in which I no longer believe whether it call itself

my home, my fatherland or my church : and I will try to express myself in some mode of life or art as freely as I can and as wholly as I can, using for my defence the only arms I allow myself to use—silence, exile, and cunning.

- (28) 「内的独白」の手法をジョイスが啓示して、『ユリシーク』(Ulysses, 1922)を書かせたのは、エドヴァール・デュシャルマンの『月桂樹は切られた』(Edouard Dujardin, *Les Lauriers Sont Coupés*, 1887)であった。ダニエル・ブランスという青年の四月のある日の夕方から深夜までの経緯を、主人公の意識に映ったまま描き出した。この一見何の要哲もない作品が、ジョイスを媒介として一九二〇年代以降の現代小説に大きな影響を及ぼしたのであった。意識にのぼったすべての事柄を文章の論理的脈絡を無視して、細大流らな執拗に描いてゆく「内的独白」の手法は、自らの内面世界の完全な把握を目指す象徴主義の方法からもたらされたものであり、その意味では象徴主義と二十世紀小説との深い近親関係を暗示している。(この項は次の二書を参考した。)

* Edmund Wilson, *Azazel's Castle : A Study in the Imaginative Literature of 1870 to 1930* (New York: Charles Scribner's Sons, 1931), p. 290.

* 『大塚隆・フランクスタイン文学講座——小説Ⅱ』一八二—一八三頁。

- (29) Virginia Woolf, *The Common Reader, I* (London: The Hogarth Press, 1957), p. 189. Originally published in 1925. Life is not a series of gig lamps symmetrically arranged; life is a luminous halo, a semi-transparent envelope surrounding us from the beginning of consciousness to the end. Is it not the task of the novelist to convey this varying, this unknown and uncircumscribed spirit, whatever aberration or complexity it may display, with as little mixture of the alien and external as possible?

- (30) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu, VII : Le temps retrouvé* (Paris: Editions Gallimard, 1954), p. 250. Originally published in 1927.

Une heure n'est pas qu'une heure, c'est un vase rempli de parfums, de sons, de projets et de climats. Ce que nous appelons la réalité est un certain rapport entre ces sensations et ces souvenirs qui nous entourent simultanément—... rapport unique que l'écrivain doit retrouver pour en enchaîner à jamais dans sa phrase les

deux termes différents. On peut faire se succéder indéfiniment dans une description les objets qui figuraient dans le lieu décrit, la vérité ne commencera qu'au moment où l'écrivain prendra deux objets différents, posera leur rapport, analogue dans le monde de l'art à celui qu'est le rapport unique de la loi causale dans le monde de la science, et les enfermera dans les anneaux nécessaires d'un beau style; ... Le rapport peut être peu intéressant, les objets médiocres, le style mauvais, mais tant qu'il n'y a pas eu cela, il n'y a rien.

- (31) William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (New York: Random House, 1936), pp. 166-67.

I will tell you what he did and let you be the judge. (Or try to tell you, because there are some things for which three words are three too many, and three thousand words that many words too less, and this is one of them. It can be told; I could take that many sentences, repeat the bold blank naked and outrageous words just as he spoke them, and bequeath you only that same aghast and outraged unbelief I knew when I comprehended what he meant; or take three thousand sentences and leave you only that Why? Why? and Why? that I have asked and listened to for almost fifty years.)

- (32) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1929), pp. 184-85. Also, *Cf.*

Notes (22).

I was always embarrassed by the words sacred, glorious, and sacrifice and the expression in vain.... There were many words that you could not stand to hear and finally only the names of places had dignity. Certain numbers were the same way and certain dates and these with the names of the places were all you could say and have them mean anything. Abstract words such as glory, honor, courage, or hallow were obscene beside the concrete names of villages, the numbers of roads, the names of rivers, the numbers of regiments and the dates.

- (33) 芥川龍之介『侏儒の言葉』(一九二五)。

- (34) 高見順『描写のうしろに寝むむらなう』(一九三六)。

- (35) 拙論「モダニスト・スタインベック——マクロの文学・その二——」(成城法学『教養論集』第八号、一九九〇年十二

月、五一四一頁。

- (36) 拙論「研究ノート・スタインベック文学事典への試み」(成城法学『教養論集』第七号、一九八八年四月)、一一〇—一一頁。

- (37) John Steinbeck, *Of Mice and Men* (New York: Covici-Friede, 1937), 186pp. この初版本に「p. 六」のページの時間の流れを見よと、次のとせりである。

1. ある夏の木曜日(の)の午後。サリーナス川近くの空地。(pp. 7-33)
 2. その翌日。金曜日(の)の午前十時頃。農場の飯場小屋。(pp. 34-68)
 3. 同じ日(金曜日)の夕方七時半頃。場面は全く同じ。(pp. 69-115)
 4. その翌日。土曜日(の)の夜。黒人雑役夫スルックスのために改造された馬具小屋。(pp. 116-45)
 5. その翌日。日曜日(の)の午後。馬小屋兼納屋。(pp. 146-71)
 6. 同じ日(日曜日)の夕方。パートナーと同じ。サリーナス川近くの木を囲まれた空地。(pp. 172-86)
- (38) Richard Astro, p. 106.

- (39) John Steinbeck, *Cannery Row* (New York: The Viking Press, 1945), p. 208.

- (40) Peter Shaw, "Steinbeck: The Shape of a Career," in *Saturday Review* (February 8, 1969), pp. 10-14, 50.

- (41) Cf., John Steinbeck, *Cannery Row*, p. 3.

How can the poem and the stink and the grating noise—the quality of light, the tone, the habit and the dream—be set down alive? When you collect marine animals there are certain flat worms so delicate that they are almost impossible to capture whole, for they break and tatter under the touch. You must let them ooze and crawl of their own will onto a knife blade and then lift them gently into your bottle of sea water. And perhaps that might be the way to write this book—to open the page and to let the stories crawl in by themselves.

〔付記〕 本稿は、一九九二年度成城大学教員特別研究助成による共同研究「日本と西洋文化」における研究成果の一部である。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....